

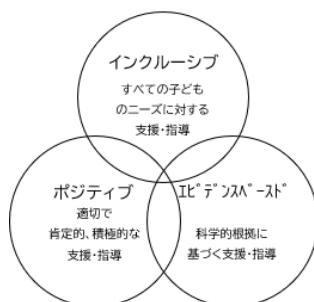
寒川町立旭が丘中学校

研究テーマ：共生的な学校環境の実現 ～肯定的、積極的な支援・指導の充実～

1 実践の目的

昨今の教育現場には、すべての子どものニーズに対して支援を実現していくという“インクルーシブな教育”が人権的な観点から要請されている。それを実現するためには、どの生徒もともに学び合う共生的な学校環境を構築し、子どもたちの多様性を認める姿勢をもたなければならない。また教師が高い人権感覚を養うことで、子どもの健全な発育を妨げるマルトリートメントを学校から排除し、意識的かつ構造的な改善による“適切で肯定的、積極的な支援・指導”を通したポジティブな教育を実現することが求められる。そして、このような教育や支援・指導が、教師の経験と勘と成功体験に基づいたものによって行われるのではなく、生徒たちの実態や支援の状況といったデータに基づく支援・指導による“エビデンスベースな教育”によって確実な成果を生み出していく必要がある。

さらに、本校において増加の傾向にある不登校生徒に関しても、心理的安全性を高めることで解消の糸口を見いだしたいと考えた。そのためには、きめ細かく生徒の変化や反応に目を配り、個の生徒への支援・指導を一層充実させる必要がある。教員の意図的なアプローチにより生徒の自尊心を育み、安心・安全な教育環境を構築することが実践の目的である。



2 実践の内容

実践の目的を達成するために、昨年度の研究より「自己肯定感を高める支援のあり方」に焦点を当てて一層の指導法の拡充と向上を図った。特に研究の一環として取り入れていた「ポジティブ行動支援（以下：PBS）」を基軸とし、その指導法を模索しながら研究を深めた。

今年度は「特別活動」に焦点をあて、それぞれの教員が PBS を取り入れた実践を展開した。年度当初に町の教育講演会「学校・学級が変わる ポジティブ行動支援」に全教員で参加し、PBS の基本理念について理解を深めた。また、夏には同じ講師を本校へ招聘し、「特別活動」に特化した PBS について指導を仰いだ。

特に体育祭での PBS 実践に重点を置き、ブロックの教員でグルーピングして「行動支援計画」を作成した。繰り返し協議を重ねることで実践をブラッシュアップし、対象とする生徒の実態に即した指導・支援を展開することができた。その実践過程（序盤・中盤・終盤）を動画で撮影し、実践報告として講師へ送付した。その後の研究会にて、体育祭での PBS 実践について講師より指導を仰いだ。

最後の研究会(まとめ)では全教員の PBS 実践をグループごとに共有し、知見を広げることができた。また継続的に指導を受けている講師からフィードバックを得ることができ、来年度以降の実践に繋がる契機となった。

3 実践の成果と課題

本年度は、4回の研修会・講演会を開催した。年度を通して同一の講師を招聘し、本校の教育実践について一貫した指導を仰ぐことにより、実感の伴う教員の学びへと繋げることができた。研究会・講演会の内容についても、「知識の習得」「実践」「フィードバック」の流れを経ることにより、各教員が意欲的に研究へ取り組むことができた。また、意図的に教員同士のグループワークを取り入れることにより、新たな気づきや学びを得ることができた。研究会・講演会に対する各教員の評価も高く、研究を深める契機となったのは大きな成果である。

数ある学校行事の中でも本校が重要視している「体育祭」の教育実践を題材として扱ったことは、すべての教員が関わりやすく共通認識をもって取り組める内容であった。各ブロックの教員でグルーピングを行い、対象となる生徒の行動について指導・支援のアプローチを協議することができたのは大変有意義であった。協議を重ねるごとに教員間の連帯感を高めることに繋がり、チームによる指導体制を構築することができた。その反面、ブロックの生徒が100人以上の集団であったため、標的とする行動が捉えづらく抽象化してしまったために設定が困難となっていたことが反省点として挙げられた。

本年は「共生的な学校環境の実現」を目指して、PBSの指導手法を取り入れ、研究を進めた。体育祭でのPBS実践は高度な内容ではあったものの、各教員が「応用行動分析学(ABA)」の理論を体験的に学ぶ契機となった。また、教員同士が実践を協議・共有することにより、実践的な指導力の向上へと繋がる研究となったことは大きな成果である。

4 今後の展開

昨年度より設定した研究テーマを継承し、引き続き「自己肯定感を高める支援のあり方」について研究を深めていきたい。特別活動でのPBS実践を通して「応用行動分析学(ABA)」の基本理念を獲得することができたため、PBSの手法を用いて肯定的、積極的な支援・指導の充実を図る。年度末の研究会にて講師より「キャリア教育」の重要性について助言を受けたため、今後研究の重点として総合的な学習の時間を設定する。たくましく未来を生きる生徒たちを育成するためには、生涯にわたる学びの基盤となる資質・能力を発揮できるようにしていくことが重要となる。生徒たち一人一人が社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながらよりよい社会と幸福な人生を切り拓いていく力を育むことが求められている。研究として特に「生きる力」の育成を重視し、生涯にわたって学び続ける意欲の向上を図る。

また、総合的な学習の時間で重視されている「探究的な学習」を積極的に取り入れ、主体的・協働的な学びへと繋がる学習環境を構築する。その手段としてPBSを用い、生徒自身が自らの行動を評価・改善できるように支援していきたい。そこで、現段階で各教員が作成・実践してきた「行動支援計画シート」を活用し、生徒が自らの行動についてABCフレームをもとに望ましい行動をとれるように支援する。可能な限り小集団を対象とした研究を推進し、生徒の特性に合わせて個別最適化された支援・指導の充実を図りたい。

来年度もPBSによる教育を“肯定的、積極的”に展開することにより、生徒と教員の笑顔が輝くアプローチを実践していく。